

「アメリカ合衆国の死刑囚収容棟」

トルーマン・カポーティ

大園 弘 訳

〈死刑囚たち〉

フレッド・バセット。22歳。両親銃殺により1967年2月、サン・クエンティン刑務所に収監され現在に至る。バセット被告は8歳の時に両親殺害を計画し、大学の文芸誌の主筆を務めていた大学1年生、18歳の時に犯行に及ぶ。同被告は両親銃殺後、州立の精神病院に2年間鑑定入院したが、精神異常ではないことが法的に認められ、裁判にかけられた。現在は死刑囚収容棟で物語や詩を書いて過ごしている。

「ぼくは両親に犯行を予告していた。銃で殺してしまうからね、って。でも、だれも相手にしてくれなかった。それで、その瞬間が訪れたんだ。ぼくは両親を殺した。ぼくがいつ両親の寝室を襲撃することになるのか、あるいは、ほんとうに襲撃することになるのかなんて、自分には予測不可能なことなんだ。だれが犯行に及び、だれが思い留まるか、それがどうやって決まるのかは神のみぞ知るだ。ダーツボードで決まるんじゃないかと思うこともある。

自分が書いたものをとっておくことが、どうしてもできないんだ。物語を一つ仕上げたとたん、看守が取り上げて破ってしまう。ここの人たちは物書きが嫌いなんだーキャリル・チェスマンとの一件があって以降はね。文学はアウトっということさ。」

ウィリアム・マイケル・ノア。ノア被告は「一生、矯正不可能な人物」と評されてきた—これまでの21年の人生の大半が出入獄の繰り返しだった。現在は看守及び囚人仲間への度重なる暴行のかどで死刑囚収容棟に収監中である。ある事例で、同被告は被害者を50回以上も刺したのち、別の囚人にも同様の行為をさせようと、被害者をその囚人の独房に引きずり込んだ。他の囚人たちも被害者をさらに50回、60回と刺した。

「なのによ、そいつはまだ息をしてたんだぜ。だから、オレが人殺しだなんて、だれにも言えねえはずだ。オレは死刑囚収容棟にいるべき人間じゃねえんだ。こんなところに入れられなきゃならん人間なんていねえ。これが現代社会だって思われてるが、どっちかといえば、古代ローマみたいなものじゃねえか。人間をライオンの前にほうり投げるってやつだよ。いっそのこと、オレたちを荷車に乗せて、金曜日ごとにライオンのところに連れてきやいいのにさ。」

シルベスター・リー・ギャリソン。ギャリソン被告は、1959年、コロラド州デンバーにて第1級謀殺で有罪となった。コロラド州立刑務所の死刑囚収容棟に収監されて8年以上が経過し現在に至る。

「ここではどうしても眠れないんだ。慣れるっていうことができないんだよ。何年ここにいようが、そいつは構わないが、慣れるっていうことは永遠にないだろうよ。だから、あれこれ考えないことにしてるんだ。くつろげないからね。もっとも、くつろぎたいと望んでいるわけじゃない。望みは一つ。ここから出ていきたいね。収容所生活なんてまっぴら御免だ。死ぬまでここにいなくちゃならないとしても、ここが気に入るようなことはないだろうよ。この欠陥をさがしはじめるさ。寝床がやけに硬いとか、壁にくっつきすぎだとか。こんな場所と恋に落ちたくなんかないね。

テレビのチャンネルが二つあるけど、観たくなければ本を読んでも、やりたいたいと思っていることをやってみても、旅に出てもいいんだぜ。行きたいところにはどこにでも行ける。むろん、架空の旅だがね。あんたが想像している旅と

は別物だ。自分が過ごした子供時代に戻る類の旅じゃない。将来の旅だ。6時か6時半にここを出る。旅の途中であんたとおしゃべりもできる。旅をやめたけりゃ、中断するだけのこと。そこいらをぶらりぶらりと歩き回る。再び旅を続けたいと思うとする。また振り出しからはじめる。はるばると旅を続け、旅路を辿りながら行先を変える。今回の旅ではニューヨークに向かうかもしれないし、カリフォルニアを目指すかもしれない。そんなぐあいの旅さ。一つの旅を終えるのに6ヶ月、7ヶ月かかることもある。旅仲間は実在の人物だ。個人的な知り合いだったり、ケネディー族やジョンソン大統領みたいにおレが知り合いになりたいと思うような人たちだ—そんな旅仲間さ。そしてオレは権力をほしいままにできる地位の人物でもある。2セント支払う。すると、いいかい、オレはもう囚人ではない。自由人だ。そんなのがオレの権力なのだ。

死刑制度なんて、あっても何の意味もないね。この制度を廃止した州が13ある。10年後にはアメリカではなくなるよ。仮にオレが執行を免れないとしたら、オレは最後のひとりでありたいね—だれも死刑を執行されなくなるんだ。そうだと、死刑制度は間違っているんだから。」

リチャード・B・シュウエンソン。シュウエンソン被告は、1962年、第1級謀殺で有罪となり、オレゴン州立刑務所の死刑囚収容棟に2年間収監された。その後、控訴審にて無罪となる。同被告は以前女性を殴打し瀕死の重傷を負わせたとして暴行罪の宣告を受け、現在はその刑期を終えようとしている。

「1961年の9月、私はポートランドのバーでこの女と知り合いになった。バーが看板になると、私たちは女の車でそこを出たんだが、女は私を家まで送ってくれた。家の正面に車を止めて、やってる最中に女が気を失った。それで私は女を車の中に置き去りにするかわりに—そのとき私は女の目を覚まさせることができなかった—ハイウェイまで車を30マイルか40マイル走らせた。女は目を覚まさないままだった。私は車の窓を開けた。雨が降り始めていた。その時点で私は女が死んでいるのがわかった。私はポートランドに引き返した。あとに

なって、私は病院か警察に向かっただけだと思ったものの、そうはしなかった。

私はパニックになり、車を止め、その場を立ち去った。遺体は1週間発見されなかったが、最終的には検死が行なわれ、死因が空気塞栓だと記載された。そして遂に裁判が始まると、塞栓症の権威の一人だという病理医がタコマから呼ばれてきた。医者は、今回の検死記録によると、どんな死因も立証できないと話した。裁判の主な論点は医学に関するものだったが、陪審員の大半には、どちらにせよ、医者たちの議論が理解できなかったのではないかと、私は今も思っている。

死刑制度も、金持ちにはほとんど影響を及ぼさないようだ。裏口から出て行くのは相変わらず貧乏人だけだ。ここオレゴンでも、有能な弁護士と大金のおかげで、無罪放免とまではいかなくとも、少なくとも終身刑の判決で結審したケースがいくつもある。終身刑に服すのは、オレゴンでも辛いことにはかわりはない。この州では、判決が未確定なままということがない。だが、死刑を宣告されるよりも、終身刑のほうがよっぽどましだ。先に何らかの可能性が残されているからだ。死刑はどの観点から考えてみても、結局以外の何ものでもない。もちろん、この制度があるおかげで、個々人が死刑に処せられる事態を防ぐ抑止力にはなりうるが、全体的に観ると、実際にはこれは社会の役には立っていない。人がこの制度の正当性を主張するその一方で、死刑執行は依然として繰り返されているわけだから。」

ジョーゼフ・モース。24歳。モース被告は、サン・クエンティン刑務所の死刑囚収容棟に二度収監された複数殺人者である。最初は母と身体障害者の妹を殺害したとして死刑を宣告された（二審では有罪が立証されたとして、終身刑の宣告を受けた）。しかし同被告は、再審の期間中に収監されていた刑務所の囚人を殺害した。

「ぼくはいつも迷い子だった—12歳のときから自活し路上生活を送ってきた。

漂白の思いでいっぱいだった。何かから逃げるといふより、何かに向かって突っ走るって感じだった。その何かが見つかったためしはない。ひょっとすると、それは愛だったかもしれない。ぼくは愛するといふ経験は一度もない。もつとも、愛されてきたとは思うがね。そうだ、愛されてきたことは確かだ。だがぼくの問題は、自分が重度の社会病質者だってことだ。経験といふものを通じて何かを得るといふことができないせいで、自分を変えることができないんだ。経験はぼくに何も教えはしない。万一、明日ここを出られるとしても、ぼくはおそらく殺人を繰り返すだろう。死刑のことなど考えもせずにやってしまうだろう。死刑囚収容棟に入ってもう5年がたち、ここでの暮らしがどんなものか熟知しているはずなのにね。」

アーネスト・シェパード3世。23歳。シェパード被告は、強盗の際に52歳の男性を殺害した罪で死刑を宣告された。サン・クエンティン刑務所に収監されて18ヶ月が経過した現在、同被告は自らの運命にある種の救いを見出したと断言する。

「死刑を宣告されたおかげで、私は成長し、人生をはっきりと理解できるようになりました—それは私が死と隣り合わせに生きているからです。以前の私は、氷の上を滑り回っているも同然でした。生き延びようとして。生き残ろうとして。しかし、今回の出来事によって、私は物事を考え、成長する時間を得ることができました。本を読み、よく考え、学習することができました。もちろん、死刑囚収容棟は「リハビリ・センター」だ、などと言っているわけではありません。死刑囚の大半にとって、ここはそれとは正反対です。ここは死の倉庫以外の何ものでもありません。それでもやはり、私にとってここは意味のある場所です。私はここで内面に閃きを見出すことができましたし、死刑で生を終えることになるとしても、私はそのときまで成長を続けていると思います。私の潜在能力が開花する前に死ぬことになるのであれば、それは不運なことです。しかし、私は死という局面に正面からまともに取り組むことができるようになり

ました一私と同じ立場の人間は、ほとんどそうなります。人々がどのような考え方をするのか、私たちにとって、そんなことは恐れるには及びません。私の幸福は内面から光を放ちます。死ぬのなら、人間らしく死にます。そうでなければ、成長したという私の思いはまやかしだということになるでしょうから。」

ロバート・リー・マッシー。26歳。マッシー被告は、片親のみの家庭の所産である。8歳のときから非行少年となった同被告は、最終的に、強盗に押し入った先で、カリフォルニア州の主婦を殺害するに至る。サン・クエンティン刑務所の死刑囚収容棟に収監されて8年が経過。しかし、ほぼすべての死刑囚とは異なり、同被告は死刑執行を受ける権利を断固として主張し、裁判所が任命した弁護士に上訴をやめるよう指示してきた。

「何もかもがうんざりだ。生きててよかったことなんか一つもない。あるのはいつもドラッグとアルコールと不幸だけだ。オレの側からも、人生に何一つ与えてこなかった。結局は、きっとこんなふうに一殺人を犯すことに一なるだろうといつも思っていた。だから、軍隊に入ろうと思った。そうすりゃ、わが身を法律の下に置くことになると考えたからだ。なのに、奴らにオレは不要だった。オレを必要とする人間なんて、それまでもいなかったがね。だから、もう終りにしようぜ。オレに残された言葉は、じゃあ来世でな、だけさ。」

〈死刑制度支持者たち〉

レオ・L・スタンレー博士。1913年から1951年までサン・クエンティン刑務所で外科医長を務める。

「私の記憶が正しければ、私は150件以上の絞首刑とガス刑に立ち会った。死刑執行に立ち会うと、全身からすべての活力が奪い去られてしまう。しかし、私は死刑制度をまったく正当な制度であると感じ続けてきた。断固として死刑制度を支持したい。数ドルを手に入れるために、理不尽な気まぐれや単なる蛮

行で、他人を殺す権利は誰にも与えられてはいない。』

アーネスト・ヴァン・デン・ハーグ博士。ニューヨーク大学、社会哲学教授。
ニュー・スクール・フォー・ソーシヤル・リサーチ、社会学及び心理学講師。
犯罪・刑罰領域の主導的理論家。

「死刑制度が犯罪を減らす上で有効かどうかは、ほとんどわかっていません。この問題のもっとも優れた研究はソーステン・セリンによってなされましたが、セリン氏は次のような発見をしました。それは、良かれ悪しかれ、死刑制度が何らかの影響を持つという確たる証拠はなく、この制度がない状況下で殺人の発生率が増加するケースもあれば、減少するケースもあるというものです。

私たちの知識は未だ乏しく、そのために私たちは二つの危険に直面しています。死刑を禁止すれば、将来的には殺人が助長され、罪のない人々が犠牲になります。一方、死刑を容認すれば一もし私たちが死刑制度による抑止効果のみを考えるとすれば一私たちは無益に人を殺し、その人の死は私たちにとって何ら社会的意味もないものになってしまいます。もし私がこの二つの危険のどちらかを選択せざるを得ないとすれば、私は（被告が）処刑されていたならば殺されることもなかった罪のない将来の犠牲者の命を危険にさらすことよりも、殺人で有罪を宣告された死刑囚の命を危険にさらすことのほうを選びます。したがって、死刑制度を保持するほうが望ましいというのが私の結論です。

司法と社会的共同利益の観点からしても、死刑制度保持の意義は極めて大きいです。よく知られているケースとしては、イングランドで起きたムーア殺人事件があります。この事件では一組の男女が性的目的で数人の子供たちに極めて残忍な拷問を加えました。被告らは拷問の様子と手順を記録し、その後子供たちを殺害しました。イングランドでは死刑制度が廃止されており、被告らの精神鑑定では異常が認められず、両被告には終身刑が言い渡されました。つまり、殺害された子供たちの両親を含む納税者は、現在、両被告が自然死を遂げるまでの期間、彼らを養い面倒をみるという責務を負っているわけです。どう

いうわけか、これは私の司法に対する考え方に相反します。人が故意に、かつ、自らの快樂のために殺人を犯すのであれば、その人物が自らの行為の責任を取ることに私は抵抗を感じません—私はその人物の処刑に立ち会っても動じることはありません。逆にその人物が生存しているのを見ることのほうが不安になります。私はアイヒマンに対する死刑を支持しましたし、計画的に殺人を犯した者すべてに対する死刑を支持します。計画的ではない犯罪に対しては、幾分ためらいもありますが。

アルヴィン・デューイ。カンザス捜査局特別捜査官。ほぼ30年間、法の執行に携わってきた。

「死刑制度の廃止を検討している州は、重大な過ちを犯していると言える。私は死刑を報復として捉えることには賛成しかねるが、犯罪の抑止力にはなると思っている。多くの人々や精神科医の多くが、そうした悲惨な犯罪を犯す人を病気だと考えている。しかし、私の観るところでは、彼らは多くの犯罪が単に卑劣で凶暴な暴漢によって行なわれているということに気づいていないようだ。そして、だからこそ、われわれには犯罪者に対応するために死刑制度が必要なのだ。多くの人々は実際に起こっていることを見ることもないし、法の執行という視点からこうした残酷な殺人事件を見るわけでもない。彼らには一部の人間が同じ人間に対してどのようなことを成しうるのかが理解できていない。

われわれ法の執行に携わる者は、犠牲者の権利が無視されていると感じている。新聞やテレビは、多くの事件において、犯罪の憐れな加害者を強調する。手足を切断された犠牲者の遺体やそうした類のものは報じない。すなわち、全体的な状況が衆目に触れることはないのだ。私は善良なる市民のために、この偉大な国家の街路を安全にすることがとても重要であると思っている。増加の一途を辿るわが国の犯罪率や連邦最高裁判所の最近の判決をみる限りでは、司法の基準は犯罪者に有利に傾いてきている。われわれ法の執行に携わる者は、断固たる政策を採択してゆかなければならない。仮に社会の安全が保たれうる

何らかの方法があるとしても、私は死刑制度を支持する。終身刑に服している個々人は殺人を犯しても何も失うものはない。一方で、看守や他の職員には家族があるはずだし、彼らにとって現状は不公平であると言わざるを得ない。」

〈死刑制度反対者〉

エドワード・ベネット・ウィリアムズ。本国における最も著名な刑事裁判弁護士の一。

「死刑制度は報復的な性格を帯びています。この制度があるからといって、犯罪の進行状況が真に終りとなることはありません。だから私はこの制度が社会的倫理に反していると思いますし、今後10年以内には本国の連邦最高裁判所は、死刑が残酷で異常な刑罰であると考えに至り、死刑を禁止するものと強く信じています。私たちは長い時間をかけながら、刑罰に関する考え方を進化させてきました。200年前には鉄の処女の刑がありました。引きずり四つ裂きの刑、爪剥がしの刑、鞭打ちの刑、火あぶりの刑、目潰しの刑がありました。私たちはこれらの刑罰をすべて廃止してきました。今や、ガス室、絞首台、電気椅子を昔の拷問台の傍らに、そしてスクリーとギロチンを世界の博物館に、すなわち、原始的な悪事の道具一切切と並べて、それらがあるべき場所へ移す時代が訪れたのです。

殺人は二つの状況下で引き起こされます。衝動的に、あるいは怒りや情念にわれを忘れて行動する人物によって犯される殺人と、自らの行為を周到に計画する人物によって犯される殺人のいずれかです。衝動的に殺人を犯す人々は、自分たちの行為がどのような刑罰につながるのかということ案じることはまったくありません。そんな事などどうでもよいのです。彼らは怒りにわれを忘れるあまり、向こう見ずにわれを忘れて騎士の如くに行動します。また、計画的かつ故意に殺人を犯す人もいます。ところで、このタイプの人、自分は捕まらないとか、死刑であれ終身刑であれ、どんな刑罰も逃れられるという前

提で罪を犯すので、刑罰のことになど注意を払いません。だから私は、犯罪が発生する州で定められている刑罰を考慮に入れたうえで人が殺人を犯したり犯さなかったりするのだと証明できるとは思いません。

死刑制度の存続を支持する人々は、主として死刑執行が一般市民の意識の中で抑止力として働くという理由で、これを支持します。では、死刑執行をテレビ報道すると仮定しましょう。公の場での死刑執行に賛成する人はいないはずです。事実、世間の人々は、人命を奪うことを極めて恥ずべきことだと捉えますので、死刑はきまって夜の静けさの中、どこか孤立した場所で、しばしば不定の時刻に執り行われます。もし実際に刑の執行を公の場で行なうとすれば、人命に対する概念が安っぽいものになってしまうでしょうし、殺人を減らすどころか、増加する要因になりかねないと思います。

私たちがわが国の‘増加傾向にある犯罪率’という話題に触れる際、私たちは実際には街路で発生する犯罪や暴力沙汰のことに言及しているわけです。これらの犯罪の四分之三は15歳から23歳までの若者によるものです。そのうちの四分之三は都会で発生しており、子供たちの反抗心、都会化の問題、無数の若者が望まれず教育を受けられずやる気もないといったスラム街の問題に起因しています。私たちは本当の原因を探り当てることによってこうした問題を解決しなければなりません。裁判所や刑事上の手続、あるいは刑罰といったものが、現在私たちが社会として関心を抱いている増加傾向にある犯罪率の性格と関連があるがごときに論じようとするのは浅薄な発想というべきではないでしょうか。」

ホラス・ヨーク氏夫人。フロリダ州ジャクソンヴィル在住。ロナルド・ヨークの母。ロナルドは仲間のジェイムズ・レイサムとともに、1961年以降、全国各地で殺人を繰り返し、7名の命を奪った。1965年春、この二人の青年は、カンザス州立刑務所にて絞首刑に処せられた。

「それはひどい体験でした。人間の命を奪い去ってしまうのですからね。本人

たちを苦しめた以上に、家族をひどい目にあわせる結果になりました。たとえば、私の娘がそうです。決して忘れることはないと思いますが、死刑執行の日取りが決まると、それはテレビで報じられました。私が仕事から帰宅すると、娘が私の首に両腕を回して、わめいたり泣いたりしはじめて、こう言いました、「お母さん、私をどこかに連れてって」と。そうです、テレビ報道が娘をひどく苦しめていたのです、14歳かそらの少女を。娘が誰かに何かをしたわけではありませんでした。なのに、そのような形で苦しめられるのです。私の場合もそうです。先だつての夜、じっくり腰をすえて映画を観ていました。それは電気椅子に送られることになっている男についての映画でした。私自身の苦しみがそういうことをきっかけとして思い起こされるのだと悟って、私はむせび泣き、自分自身をコントロールすることができませんでした。

私はロニーにさよならを伝えに行った日のことをはっきりと覚えています。とても辛かったです…どう声をかければよいのかわかりませんでした。息子は自分の家族やいろいろな家族のことを話しました。妹たちがどうしているのかとか、何か情報が得られたかなどと尋ねたものです。あまり望みもないと自分では思っていたようですが、ひどくナーバスにはなってはいながらも、われを忘れまいと懸命に努めていました。誰かがケーキとアイスクリームの差し入れを持ってきてくれたのを覚えています。夫と私はできるかぎり平常心でしようと努めました。そうそう、私たちは差し入れに少し手をつけましたが、息子はまったく食べようとはしませんでした。コーラは飲みましたが、ひどくナーバスなのがはっきりと見て取れました。息子には返す言葉がないのはわかっていたので、あまり声をかけすぎるともとても辛いことでした。

私たちはジミー・レイサムにも面会に行きました。ジミーは泣いていて、こう言いました、「ヨークさん、ぼくは生まれてこなければよかったと思います。ロニーよりも重い責任を負っているからです。」私は彼にこう言いました、「ジミー、そんなふうに考えてはいけないわ。だって、二人とも罪を償って死んでいくのだから。主があなたたち二人をお赦しくくださいますように。」私たちはそ

れから暫く話を続けましたが、彼は妹に電話をかけてくれたかと私に訊いたので、私は電話をかけたところ、来れたらくると言ってたわ、と伝えました。私がある場を去ろうとしたとき、彼はこんなことを言うんです、「おばさんが来てくれてとても嬉しいよ。」それから彼は私の首に腕を回しました。「ぼくの顔にキスをしてください、」続けて「ヨークさん、天国できっとおばさんに会うからね。」って言うんです。それは私にとってこの世の何にもまして価値のある一言でした。そのときが彼を見た最後でした。

教戒師がその後戻ってきたとき、教戒師は何枚かの紙とロニーの私物を私のところに持ってきて、それらを私にくれました。彼は深く感動していました。息子たちの死に際が実に見事だったらしいのです。ロニーは人々を見おろして、僕を赦してください、神は僕をお赦しく下さいました、僕は天国に旅立ちます、そこであなた方と会いたいです、と告げたそうです。ロニーは最後の13段の階段を昇るにあたり、教戒師に詩編の23番を朗読してくれるよう頼んだそうです。もちろん、ロニーは私たちにさよならと伝えてほしいということなどを教戒師に告げたそうです。

私たちはその日の午後の一部と夜を教戒師の家で過ごしました。そこはちょうど拘置所を見おろす位置にありました。私が住んでいる町の教会の牧師さんも来てくれていました。私はそこがおそらく息子に一番近い場所だと感じました。私は主人が長椅子に仰向けになっていたのを覚えています。12時半ごろだったと思います。牧師さんと私はテーブルについて、聖書を読んでいました。私たちと一緒にいた友人全員が待機していました。友人たちは拘置所を見おろす階段に座っていました。主人が突然ぱっと立ち上がり、泣きながら外へ駆けだしました。牧師さんと私は主人のあとを追って、ドライブウェイまで降りていきました。主人は跪いてお祈りを唱えていました。それで私たちは主人をそのままにして、引き返しました。のちに主人が話してくれたのですが、長椅子に横になっていたとき、突然自分の足が階段を昇るリズムを刻みはじめ、止めようがなかったのだそうです。主人はロニーが階段を昇りはじめたのだと確信し

たというのです。そういう体験の最中で、主人は外に駆けだし、フェンスのそばで跪いてお祈りを唱えはじめたのです。そこは拘置所全体を見渡すことのできる高台でして…あらゆる所に明かりが灯っていて…。そこに座って、拘置所の中で何が起きているのかということを考えるにつけ、すべての明かりが、中での出来事について何らかのメッセージを伝えているかのように思えました。

翌日の火曜日、私は霊安室に行きました。息子は祭壇に安置されており、私は遺体を駅へ運ぶ時刻まで、遺体に付き添っていました。故郷のパナマ・シティで埋葬することにしていたのです。

私たちはカンザス州カンザス・シティを、火曜日の夜11時45分ごろ出発し、霊柩車の待つフロリダ州コトンドイルに木曜日の10時45分ごろ着きました。主人と私は息子の遺体と一緒に列車に揺られてはるばる戻ってきました。パナマ・シティへは11時ごろ着きました。そこから同じ日の午後4時ごろ、息子の遺体はわが家へ戻ってきました。その日の夜は遺体を自宅に安置し、金曜日の11時に教会で一息子を育ててくれた教会で一葬儀を執り行いました。教会は息子に会いに来た友人たちでいっぱいでした。その日の暑さには閉口しました—6月だったのです—棺を開けることができないかもしれないかもしれません。私は棺を開けられるよう、誠心誠意お祈りを唱えました。大勢の身内や友人たちが、息子の顔を見たいと望んだからです。そして私たちの願いは叶えられたのでした。」

〈結び〉

以上のレポートは、現在作成中で近日テレビ放映予定のドキュメンタリー映画「アメリカ合衆国の死刑囚収容棟」からの抜粋である。プロデューサー兼作家本人は、映画の中で自説の表明を差し控えてはいるが、本号のテーマとの関連から、以下のように付言している。

「私自身は死刑制度に反対だ。だが、心情的に反対だとか、死刑制度廃止論者

が唱える往々にして見せかけだけの統計を理由に反対だというのではない。彼らは死刑制度を時代遅れだとか、抑止力とはならないとか信じきっている。

逆に、私の考えでは、もし死刑制度が私の言う常習的な殺人癖に苛まれた犯罪者つまり、殺人を単に自分たちが生きていくうえでの副次的問題としか捉えない殺人者や、自らの身元を隠すために殺人を犯す誘拐犯や強盗、そして、ますます巨大化する同業組合、すなわち、雇われ殺人者集団のメンバーたちに迅速かつ規律正しく適用されるのであれば、この制度は極めて有効な抑止力となりうるのだと思う。確かに、利益追求のために殺人を犯す殺人犯（また、多くの事例でそうなのだが、快楽目的の殺人犯も含めて）に対してはそうであろう。死刑廃止論者は死刑執行の可能性を慎重に検討してきた結果、廃止に至ったと強く主張する。私は彼らがこの制度を撤廃した点には同意する。しかし、同意の理由は、もっぱら、殺人犯たちにはたとえ捕まって有罪となっても処刑される可能性はほとんどないとわかっているからだ。一般的に、第一級謀殺の罪を宣告された者は、7年の刑に服したのちに仮釈放されるし、12年を越える刑期はめったにない。いわゆる終身刑とは名ばかりのものだ。最も危険な常習犯ですら、すべての州で、必ず仮釈放となる。そして、そのうちの殺人常習犯の数は、死刑廃止の主導者たちが頻繁にかつ不正確に引用する数字を遥かに上回っている。

欠点は、州立裁判所や連邦裁判所で行なわれている奇妙にも複雑かつ実用性を欠く上訴のシステムや、有罪宣告を受けた者がキャリル・チェスマンやウィリアム・ウィザースプーンにならって事態の解決を先延ばしし、10年あるいはそれ以上も無限に控訴を繰り返すことができるような法解釈上の問題にある。実のところ、わが国の裁判所は死刑を科したくはないのだ。それで、連邦最高裁判所でなされているように、合衆国憲法の名のもとに、「残酷かつ例外的な刑罰」を宣告することで物事に決着をつけるのではなく、このような抜け道的な愚行を可能にしてしまっているのだ。というのも、現状ではこれがまさに現実なのだ。囚人たちを檻の中に閉じ込め、精神医学的なケアもせず、動き回るこ

ともさせず、目的のないただ辛いだけの宙ぶらりん状態で来る年も来る年も無為に過ごさせることこそ残酷かつ例外的だ。それは卑怯ともいえるし、シニカルでもある。善悪の判断ができる社会であれば、こんな状況を容認してはいけない。

問題：もし私たちが救いようのない殺人願望と、釈放後殺人を繰り返す常習犯を根絶しないとすれば、私たちはそれらにどう対応すればよいか。死刑と早期釈放の中間的な選択肢はないように思われる。

しかしながら、解決策はあるのではないだろうか。合衆国憲法の修正が必要になるかもしれないが、第一級の犯罪をすべての州の法域から外して、連邦裁判所の管轄にすればどうであろうか。その場合の直接的な利点は、殺人に関するすべての裁判が、犯罪発生地域の外で執り行われることである。たとえば、ニューヨーク州で殺人を犯した者がカリフォルニア州で裁判にかけられる。こうすることで、主要な問題点の一つが解決できるであろう。つまり、公判前の評判が陪審員に偏見を抱かせる可能性が排除されるのだ。このプランのポイントは、殺人罪を宣告されたすべての者が明確な判決を受けるのではなく、1日から最長終生までの、刑期を定めない判決を受けるという点だ。実際の刑期は裁判官や陪審員が決めるわけでも、諸制度に最も無知な者や仮釈放許可局が決めるのでもない。それは殺人事件に備えて特別連邦刑務所に所属する専門の精神科医が決定する。連邦刑務所は厳重に監視された施設であると同時に治療センターでもあり、そこでは、いわゆる精神科医の存在が曖昧で、幾分いかがわしい存在であるような州立刑務所の場合とは異なり、収容者の更正に向けた真剣な努力がなされるのだ。このシステムのもと、精神科再審理委員会が嫉妬心でカットとなって妻の首を絞めて殺害した男性に対して、十中八九再犯の可能性なしとの判断から、僅か3ヶ月の収監を決定する場合もあろう。また、チャールズ・ホイットマンやペリー・スミスのような人物は、生涯に亘り連邦刑務所で過ごさなければならぬ場合もあろう。ただし、彼らにはそれが真の意味での終身刑なのかどうかは決してわからないようになっており、したがって、彼

らは僅かながら希望を持ち続けることができるのだ。」(完)

訳者あとがき

本稿はカポーティ (Truman Capote 1924-84) 著 “Death Row, U.S.A.” (1968)⁽¹⁾ の邦訳である。原著は同名のドキュメンタリー映画の原稿 (の一部) に、作者兼プロデューサーのカポーティがアメリカの死刑制度への見解を添えて *Esquire* 誌に掲載したものである。

映画 “Death Row, U.S.A.” は、カポーティが ABC 局 (American Broadcasting Company) から25万ドルの製作費の提供を受け、約15ヶ月を費やして、1968年10月に完成させたものである。カポーティと ABC 局との関係は、彼の短篇小説 “A Christmas Memory” (1956) が、プロデューサー、フランク・ペリー (Frank Perry) によりドラマ化され、1966年12月21日、同局の番組 「Stage 67」 で放映されたときに遡る⁽²⁾。以後、“Among the Paths to Eden” (1960) [67年12月17日放映]、“Laura” [68年1月24日放映]、“The Thanksgiving Visitor” (1967) [68年11月28日放映]が同局によりテレビドラマ化されていく。カポーティと ABC 局とのこれらの共同企画は、合計4つのエミー賞 (Emmy award) と1つのピーボディー賞 (Peabody award) を関係者にもたらした⁽³⁾。カポーティが映画 “Death Row, U.S.A.” の製作にあたり同局より25万ドルもの巨費を得たのも、このような背景があつてのことだった⁽⁴⁾。

ところが、映画 “Death Row, U.S.A.” は、実際には、テレビ評論家を対象に試写会が催されただけで、放映には至らなかった。死刑囚へのインタビューを中心とした映画の内容が、「あまりにもぞっとする」、「構成と視点の一貫性に欠陥がある」⁽⁵⁾、「番組としての質への失望」⁽⁶⁾など、ABC 側の否定的な評価が、その理由として挙げられている。この映画が哀愁や共感を刺激する “A Christmas Memory” に始まる一連のテレビドラマとは対照的に、「死刑制度」という重苦しい社会問題を直視せざるを得ない内容であつてみれば、同局の反応も理解できなくはない。

カポーティは *In Cold Blood* (『冷血』1965)の執筆をとおして、ペリー(Perry Smith)とディック(Dick Hickcock)以外にも何人かの死刑囚にインタビューを行なっている。この経験はカポーティにアメリカの死刑制度に対する問題意識を芽生えさせた。映画“Death Row, U.S.A.”は、したがって、アメリカ合衆国の最高裁判所にこの制度の改善を促すという明確な目的で製作されたものだった⁽⁷⁾が、上記のような経緯により、闇に葬り去られてしまった。しかしながら、死刑制度に対する彼のメッセージは、幸いにも本稿の〈結び〉にかろうじて活字として記録されているのである。

注

- (1) Capote, Truman. *Esquire*, 70 (October 1968), 194-199. 原著にはインタビューに応じた面々の顔写真は1枚ずつ添えられている。ちなみに、本稿で死刑制度反対論者の一人に挙げられているホラス・ヨーク氏夫人(Mrs. Horace York)の談話に登場する息子ロナルド・ヨーク(Ronald York)とその友人ジェイムズ・レイサム(James Latham)は、『冷血』の中でも紹介されている。それによると、この二人は、ペリーとディックが収監されていたカンザス州立刑務所に、1961年11月2日に収監された。また、死刑制度支持者の一人として収監されたアルヴィン・デューイ(Alvin Dewey)は、もちろん、『冷血』のデューイと同一人物である。
- (2) 放映翌日の *New York Times* では、プロデューサーであるペリーの本来の実力がこの作品では発揮されなかったこと、ナレーターの一部を担当したカポーティの単調な鼻声が作品の詩情と感動を損ねたことなど、幾つかの欠点が指摘されたものの、スック(Sook)役を演じたページ(Geraldine Page)がそれらの問題を相殺するほどの名演技を披露したことが報じられている。Cf. Gould, Jack. “Capote’s ‘A Christmas Memory.’” *New York Times* (22 December), 67. なお、ページはこの作品でエミー賞を獲得している。
- (3) Anon. “Truman and TV.” *Time*, 92 (29 November). 73.
- (4) 『冷血』の成功も、むしろ、両者を結ぶ要因になったであろう。
- (5) Anon, *op. cit.*, 73.
- (6) Gould, Jack. “Capote Is at Odd with A.B.C.” *New York Times* (31 October), 95.
- (7) *Loc. cit.*